A Bride in Underground-Castle

地底魔城の花嫁　終章

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21003291

ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, ヒュンマCandyFes, モルグ, ダイの大冒険

もし、地底魔城の闘技場で決着がつかず、ヒュンケルが不死騎団長を続けていたら、から始まる物語の終章。
パプニカと不死騎団との戦いは終わり、不死騎団長ヒュンケルは、パプニカ軍に投降、パプニカは解放された。
パプニカ側の捕虜となったヒュンケルのもとに、マァムとモルグが訪れる。
ヒュンケルとマァムの関係は。

2023.11.11 ヒュンマCandyFes合わせ。

Table of Contents

地底魔城の花嫁　終章

　ヒュンケルは、パプニカ城の地下牢で、冷たい壁に背をもたれかけさせながら、ぼんやりと虚空を見つめていた。
　投降の将なので、いったんは捕縛という扱いにし、牢に入れられるのはやむを得ない。ヒュンケルが逆の立場でもそうしただろう。
　だが、やはり、一度は攻め落とした城の地下牢にいるというのは、皮肉なことこの上なかった。
　狭い牢の中には、ベッドが一台置かれており、壁には蝋燭の乗った燭台が取り付けられていた。
　ヒュンケルは、そのベッドに腰かけたまま、壁に頭を持たれかけさせ、天井と壁の継ぎ目付近に視線を投げかけていた。
　ヒュンケルは自嘲した。
—ダイはああ言ったものの・・・王女が重臣たちを抑えられなければ処刑もありうるか・・・。負けた以上はやむを得んが・・・。
　だが、自分が処刑されれば、不死騎団のアンデッドモンスターたちはどうなるのか。ヒュンケルには、それが気がかりであった。
　幸い、ヒュンケル自身の命が尽きても、彼らの存在には影響はない。
—撤収は無事に進んでいるのだろうか・・・。
　パプニカとの取り決めで、不死騎団は、地底魔城から引き上げることになっていた。地底魔城が鬼岩城や魔界とつながっている以上は、その措置は仕方がなく、ヒュンケルとしては受け入れざるを得なかった。
　代わりに、ヒュンケルは、彼ら不死騎団員が安全に暮らせる場の提供を求め、パプニカ側はそれを受け入れたため、不死騎団員たちは、大掛かりな転居をすることになったのだ。
　そろそろその撤収も完了する頃だった。
　気がかりは、不死騎団員たちのことだけではなかった。
　ヒュンケルの胸には、常に、想いを交わし合った、そして、彼が妻だと呼んだ娘の姿があった。
　あのダイとの戦いの後は、マァムとはほとんど顔を合わせてはい

なかった。
　会いたい、との思いは募るばかりであった。
　だが、ヒュンケルは、彼女に対する感傷を押し殺した。
—マァムは、ダイたちの元に帰れば大丈夫だ。俺がいない方が、彼女の今後のためにもよいだろう。
　そんなことを考えていると、ふと、牢の外から足音が聞こえた。
　ぎいっときしんだ蝶番の音を立て、扉が開く。
　そこには、逆光の中に佇む、最愛の女性と、執事の姿があった。
　ヒュンケルはふたりに呼びかけた。
「マァム。モルグ。」
　ふたりは、いつになく神妙な面持ちをしていた。
　ヒュンケルは、不安を抱き、気になっていたことを尋ねた。
「どうした。何かあったのか。撤収はどうなった。」
　答えたのはモルグであった。
「撤収につきましては問題ございません。明日にでも完了いたします。
　また、移住先の地は、山間の盆地でございますが、周囲に人もおらず、隠れ住むには問題ございません。先発隊からの報告も受けております。」
　モルグの回答に、ヒュンケルは胸をなでおろした。
「そうか、それはよかった。
　俺は戻れるかは分からんが、俺がいなくても、モルグ、あいつらのことは頼んだぞ。」
　モルグは、涙の滲んだ眼差しを床に落とし、悔しげに呟いた。普段から落ち着いている老練のこの執事には、珍しいことだった。
「ヒュンケル様・・・おいたわしい・・・本来ならばあなた様はこのような扱いを受ける方ではございませんのに・・・。」
「負けは負けだ。仕方あるまい。そのうち、処分も出るだろう。最悪の事態を覚悟はしておいてくれ。」
「ヒュンケル様・・・！」
　ヒュンケルは、内容に不釣り合いなくらい明るい声でふたりに呼びかけた。
「ふたりがそんな顔をしているから、何か良くないことでも起きた

のかと思った。杞憂だったな。」
　ヒュンケルが笑みを漏らしてそう言うと、モルグとマァムは顔を見合わせた。
　そしてまた神妙な顔になる。
　ヒュンケルもまた、その気配を感じ取って、表情を引き締めた。
　マァムは、モルグと顔を見合わせると、うなずき合った。そして、彼女は、言いにくそうに、ヒュンケルに告げた。
「あのね・・・地底魔城の片づけをしていたら、これを見つけたの・・・。」
　そう言って、マァムは、小さな小箱を彼に差し出した。
　古いもののようで、ところどころ錆びてはいたが、繊細な金飾りで装飾された宝石箱のような小箱であった。
　その小箱は、分厚い本のような形になっており、横向きに開けるようになっていた。
　ヒュンケルは、マァムに差し出されるまま、その小箱を受け取った。そして、その扉を開いた。
　その中に現れたものを見て、ヒュンケルは、目を見張った。
「これは・・・魂の貝殻・・・？」
　マァムは頷いた。
　死にゆく者のメッセージを留める「魂の貝殻」。その存在はヒュンケルも知っていたが、これが地底魔城にあったとは、気付かなかった。誰が、どのような目的で置いていたのだろうか。
　マァムは、どこか苦しそうに、慎重に、言葉を紡いでいった。
「魂の貝殻だから、何かメッセージが入っているかもしれないと思って・・・ごめんなさい・・・聞いてしまったの・・・。
　貴方のお父さんのものだったわ・・・。」
「父さんの！？」
　ヒュンケルは、驚愕に目を見開いた。そして、小箱を持つ手が、わずかに震えた。
　マァムは、言葉をつづけた。
「貴方が持っているべきものだと思ったから、貴方に渡したいって思ったの。」
「・・・俺宛の、メッセージなんだな。」

マァムは頷いた。
ヒュンケルは、しばらくの間、ただ黙ってその小箱を見つめていた。誰も何も言わなかった。
その沈黙がどれくらい続いただろうか。
やがて、ヒュンケルは、震える手で、魂の貝殻を手に取った。
マァムは、それを見て、控えめに、ヒュンケルに声を掛けた。
「ヒュンケル、私たち、外に出ているわね。」
「いや、いい。ここにいてくれ。
いてほしい。」
ヒュンケルは、そう言うと、そっと魂の貝殻を耳に当てた。
魂の貝殻は、水底の記憶を抱いているのだろうか。優しい波の音が流れ込み、そして、その向こうから、懐かしい、もう１０年以上もの間、耳にしてこなかった、あの人の声が聞こえてきた。
—・・・ヒュンケル・・・。
「父さん・・・。」
ヒュンケルは、我知らず、呟いた。
モルグは、ふたりを残したまま、音を立てずにそっと牢の外に出た。
ヒュンケルは、そのまま黙って、亡き父の言葉に耳を傾けていた。
その彼の姿を、マァムは、立ったまま、黙って見つめていた。マァムは自分もまた傷付いたかのような痛々しい眼差しで、ヒュンケルを見つめていた。
時が過去に巻き戻され、凍り付いていた。
動くものも発される言葉もなく、時間の流れそのものがなくなったかのようであった。
やがて、ぽつりと流れ落ちた涙が、時を再び動かし始めた。
ヒュンケルはゆっくりと、魂の貝殻を持った右手を下げた。そのまま、大きくうなだれる。
彼はしばらくの間、沈黙していた。しかし、やがて、小さくマァムに呼びかけた。
「マァム・・・俺は・・・間違っていたのか・・・？」
その低い声に、マァムの胸がずきりと痛んだ。

マァムは、大きく首を横に振った。
「確かに、アバン先生のことは、貴方は誤解していたと思う。でも、お父さんが貴方に願った、人間らしく生きてほしいっていうことは、貴方は、そうしていたんじゃないかって思うの。」
　マァムは、丁寧に言葉を紡いでいった。
「お父さんの願っていた人間らしく生きてほしいって、周りの人を大事にして、その人たちとの縁を大切に生きてほしいってことなんじゃないかしら。人は、人の中で生きるものだから。
　でもその相手って、必ずしも人間じゃなきゃいけないってわけじゃないと思うの。
　ヒュンケルは、確かに人間社会を攻めたわ。そのために、多くの人が亡くなったのは間違いないし、それは、起きてはいけないことだったと思う。
　もう二度と、あってほしくないわ。
　でも、貴方自身は、貴方の周りのみんなを大事にしていた。モルグさんたち、不死騎団のみんなを、ヒュンケルは大事にしていたわよね。
　それって、お父さんが貴方に望んだことから、大きく外れていることじゃないって思うわ。」
　ようやく、ヒュンケルは顔を上げた。泣き出しそうな面のまま、微笑みを浮かべ、愛おしそうにマァムを見つめていた。
「・・・マァム。
　ありがとう。」
　だが、ヒュンケルは、また視線を下げると、迷いを見せながらマァムに尋ねた。
「お前がそう言ってくれるのは、ありがたい。
　だが、俺が多くの血を流したことは事実だ。その責任は取らなければならん。
　まだ間に合うだろうか。
　今からでも、俺は、父の望んでくれたように生きられるだろうか・・・？」
「ええ。もちろん。」
　マァムはきっぱりと言い切った。その迷いのない発言に、ヒュン

ケルのほうが驚いた。
「ずいぶんはっきり断言するんだな。」
「それはそうよ。
　私、この先もヒュンケルと一緒にいるわ。
　だって、私は貴方の妻なんでしょう？」
　かつて、彼が何度も口にし、そしてその度にマァムに拒否された言い回しだった。その言い回しをマァム自身が使ったことに、ヒュンケルは苦笑した。
「それはもういい。あれは鬼岩城で宣言しただけだ。こちらでは無効だろう。」
「そうなの？私のこと・・・隅々まで知っているって言ってたのに・・・。」
　マァムは拗ねたように、口を尖らせた。これもまた、いつか彼自身が発言した覚えのある言葉に、さすがのヒュンケルもうろたえた。
「い、いや、それは・・・すまん。
　俺が責任をとるべきだとは思うが・・・今の状況では、俺と離れた方がお前にとってはいいものだと・・・。
　俺は、パプニカにとっては、罪人だ。」
　マァムは、笑みを浮かべると、落ち着いた声色で、ゆっくりと語り始めた。
「お父さんは、貴方がごく普通に生きていくことを望んでいたんじゃないかって思うの。周りの人と触れ合って、支え合って、家族を持って・・・。
　人間の温かさを知ってほしいって、たくさんの意味があると思うんだけど、お父さんが貴方を育てて幸せだったから、貴方にもそれを知ってほしいってこともあるんじゃないかなって。」
　そう言って、マァムは立ったまま、ヒュンケルの頭を抱きしめた。ふわりと温かさがヒュンケルを包み込む。マァムの腹に触れた彼の耳に、彼女の体内の鼓動が伝わってきた。
　マァムは、ヒュンケルを抱きしめながら、呟いた。
「貴方がこの先、難しい立場に置かれることは分かっている。でも、それでも、私は貴方の側にいたい。

貴方と一緒に、生きていきたいの。
だから、もう一度、今度は、貴方の本当の声で私を呼んで。」
ヒュンケルの耳に、マァムの言葉とともに彼女の鼓動が響く。確かに生きているのだという証が伝わる。
その鼓動の奥に、ヒュンケルはもう一つの響きを感じ取った。
ヒュンケルは、手にしたままの魂の貝殻から、父の気配を感じていた。懐かしい父の声は、ヒュンケルへの深い慈しみに満ちており、いまなおヒュンケルを愛してくれているのだとはっきりと告げていた。その父の思いは、そっとヒュンケルの背を押した。
ヒュンケルは、魂の貝殻をベッドに置いた。
そして、自由になった両手を、ヒュンケルは、マァムの背に回した。座ったまま、マァムを抱きしめる。その腕も、声も、震え、涙に濡れていた。
ヒュンケルは、振り絞るように告げた。
「お前は・・・俺の妻だ。
愛している・・・。」
マァムは、慈しむように、ヒュンケルの髪を優しく撫でていた。

牢から出たマァムは、牢の前の廊下から地上につながる階段を上がった。その上り口に、彼女の仲間たちが待っていた。
中でもモルグは、ひどく心配そうな面で、待ちきれなかった様子で彼女に声を掛けた。
「マァム様、ヒュンケル様の御様子は・・・。」
マァムは笑顔でモルグに応えた。
「大丈夫。
動揺はしてたけど、思ったよりも落ち着いているわ。自暴自棄になったりもしていない。
心配ないとは思うけど、私もなるべく、一緒にいるようにするわ。」
モルグは、大きく息を吐き、明らかにほっとした顔を見せた。
「そうですか・・・よかった・・・。」
「あとは処分の方だけど。」
マァムにダイが答える。

「うん。地底魔城からの撤収が終わったら、レオナが正式に発表するって。」
　モルグは不安そうに尋ねた。
「・・・厳しいお沙汰になりますでしょうか。」
「それはないよ！おれが反対する！！」
「そうだな。俺も微力ながら力になろう。」
　ダイに同調したのはクロコダインだった。
　マァムもうなずいた。
「彼はアバンの使徒よ。パプニカの人々にとっては、仇なのは間違いないけど、この先、大魔王と戦っていくには、彼の力が必要だって、ちゃんと説明するわ。それにモンスターたちとの間を和解していくにも、彼のような立場の人は必要だと思うの。」
「悔しいけど、あいつが強ぇえのは間違いねえからな。最初は損得でいった方が早いだろうな。」
　腕を組みながら難しい顔で発言するポップに、マァムも頷いた。
「とにかく、わたくしどもは、ヒュンケル様のお立場が悪くなりませんように、地底魔城からの撤収を急ぎます。
　それでは、失礼致します。」
「送っていこう。」
「クロコダイン様、かたじけのうございます。」
「あ、おれも行く。地底魔城、見てみたい。」
「ピィっ！」
「はい。ご案内いたします。」
　クロコダインとダイは、モルグとともに城の外に出ていった。その上を、ゴールデンメタルスライムが飛んでゆく。
　あとには、ポップとマァムが残された。
　ポップは、じっとマァムを見つめた。
　マァムは尋ねた。
「なに？ポップ。」
「いや・・・おめえ、何かたくましくなったなあって・・・思って。」
　その言葉に、マァムは幾分かいたずらめいた笑みを浮かべた。
「それはそうよ。お母さんだもんね！」

予想もしていなかった返事に、ポップは面食らった。
「えっ・・・ってどういうことだよ！？」
「ふふ。内緒。」
　マァムは、口元に人差し指を当てて、微笑んだ。
　そして、彼女は、廊下から見える中庭の空を仰ぎ見た。
　どこまで広がる青い空は、対立という地底から抜け出した若者たちの行く末を示していた。